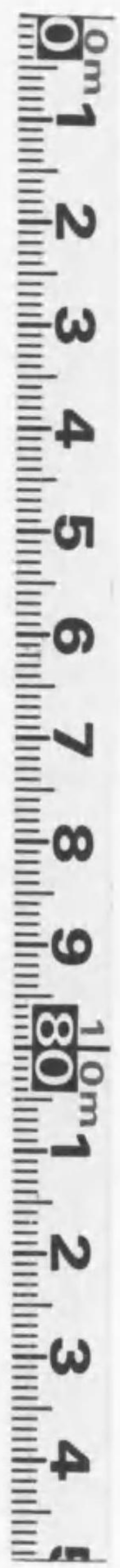




新教育新聞第九十九號 明治十一年九月十一日

目次

- 伊藤戀成君の謀略
- 方言の解
- 物理のとち
- 黑板墨製法
- 雜報



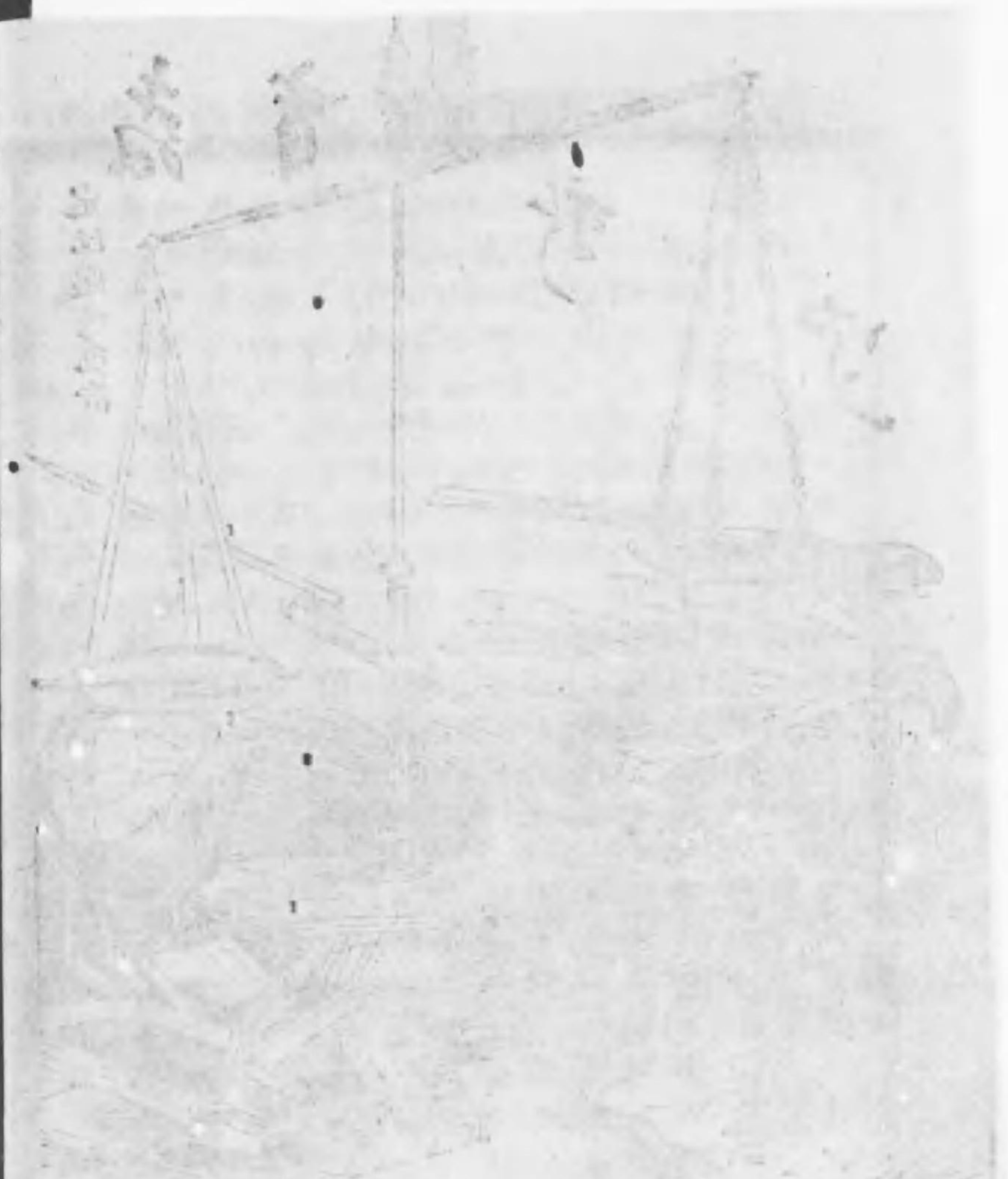
始



伊藤慈成君ニ謀ル

攝陽寒夫

世ニ伊藤慈成君ナル教育者アリ教育新聞第十六号ニ於テ書學ハ百工術學  
 ニ於テ最須要ナル所以ヲ縷述シ其教授ノ方法ヲ普ク世ニ質サレクハ僕未  
 タ其人ニ接セス其人ト言ハサレハ果シテ其人ノ如何ヲ知ル能ハスト雖  
 遠ク之ヲ意フニ君ヤ教育ニ熱心シ百術ニ注意シ至貴至重ナル兒童ヲ引受  
 ケ入世無上ノ教育ヲ以テ自ラ任スルノ人ニシテ他日甘味ノ美果ヲ結ハル  
 ハナラン我輩寡陋ノ頑民固ヨリ君ノ下駄ヲ持チ氏ノ轅鼻揮ニ於カルモ  
 出来サル者ナリト雖モ亦教育者ノ尻尾ニ点座シ及ハスナガラモ身ヲ教育  
 ニ委テ意ヲ術藝ニ注ク者ナルヲ以テ君ノ質議ヲ讀ミ徒ラニ之ヲ奏越視ス  
 ルニ忍ヒス因テ今茲ニ身代ノアラシク限リテ擔キ出シ(否)書キ出シ以テ君ニ  
 謀ル君幸コ僕カ非才ヲ嘲リ生カ冗言ヲ捨テス苟モ是トスル処アレハ之ヲ  
 助ケ其非トスル處ハ之ヲ教ヘ玉ハラハ僕カ幸之ニ過キシ  
 我輩今其方法ヲ述ル前ニ於テ先ツ一言ノ陳ベザル可ラサル者アリ夫レ書  
 學ハ既ニ君ノ述フル如ク百工術學ノ基礎ニシテ所謂人ヲシテ心匠ヲ精密  
 ナラシムルノ要科ナリ故ニ之ヲ教授スルニ當リ先ツ教師ノ最モ意ヲ留ム  
 ヘキハ生徒ヲシテ其心ヲ靜メ精神ヲ定メ決シテ遠急ノ意ヲ發セズ殊ニ教



目次

伊藤慈成君ニ謀ル	攝陽寒夫
...	...
...	...
...	...
...	...

場ヲシテ靜肅ナラシムルコアリ若シ之ニ注意セムハ如何ナル善良ノ教授法ヲ施コスモ或ハ水泡ニ歸スルノ恐レアラソ是レ我輩カ最モ緊要トスル処ニシテ陳述セサル可ラサルノ要件タリ  
抑書學ノ基本ハ直曲兩線ニアリ故ニ書ヲ教フルニハ必ス先ツ十分ニ直曲ノ二線ヲ書カシムベシ其教授法ハ今一線ヲ書カシムルニ教師黑板ニ向ヒ其兩端トナスベキ処へ各一点ヲ印シ生徒ヲシテ之ニ習フテ各自ノ石盤上ニ二点ヲ印セシメ而シテ教師再ヒ黑板ニ向ヒ此ノ二点ヲ連テ生徒ニ命シテ復此ノ如クセシム(因ミニ云フ線ヲ書スルノ際能ク氣ヲツメテ之ヲナセハ大ニ手ノ震動ヲ止ムベシ)曲線ヲ書カシムルモ亦此ノ如ク(但シ曲線ハ兩端ト中央へ三点ヲ印ス)以テ漸次ニ長線ニ及ボシ或ハ有限 橫線或ハ斜度或ハ集合網様折波渦及紋印等ヲ教へ(折波線ハ其曲折毎トニ点ヲ印セシム)其少シク巧ニ至ルヲ待テ点ヲ印セズ直ニ之ヲ書セシム此ノ如クシテ生徒稍巧ニ至ルノ後物体ノ粗形ニ及ボスヘシ而シテ其物品ノ書カシムルニ成ル可ク生徒日常見ル所ノ容易ノ物ヨリ始ムベシ其教授法前ノ如ク其書ノ局処へ点ヲ印シ直曲線ニ之ヲ繋カシム而シテ物品ヲ教フルニ當リテハ宜數丁寧ニ其父所ノ傾度ヲ理解セシムベシ例之へハ今茶碗ヲ書カシムルニ其上邊ノ曲度大ナレハ隨テ下邊ノ曲度多クシ上面狹少ナレハ從

テ其高サヲ増ス等ノ理ヲ説明シ或ハ一物ノ上面ニ書キ生徒ニ向テ上面ノ廣サヲ此ノ如クスレハ高サハ大抵何程ニナスヘキヤヲ發問シテ之ヲ書カシム或ハ不釣合ノ物品ヲ故サラニ書キテ其非ナル所ヲ指サシムル等種々ノ法ヲ變シテ其理ヲ解キ生徒殆ント其理ヲ解ズルニ至ラハ實物ヲ示シテ其形ヲ書カシメ以テ漸次難書ニ及ボシ終ニ生徒ヲシテ自ラ趣向ヲ立テ種々ノ書ヲ書カシムヘシ然レ而シテ之ヲ教フル固ヨリ生徒ノ力ニ從テ變セサルヲ得スト雖モ大凡一週二三ノ書ヲ教へ週中一度ノ淨書ヲナサシメ以テ習字清書ノ如ク之ヲ斧正スベシ此ノ如クシテ懇々教授ヲ施サバ希クハ其効ヲ奏シ得ルニ庶カラム乎聊カ所思ヲ書シテ以テ報スルヲ爾リ

方言の解

大和 秋洲考

○シヨソガイの辨  
シヨソガイのハム。おて又此シヨムガイのム。おウお變シシヨウガナ。イとある此ナイのナ。マアにて全くシヨウガナイの語あるべし其例ハ稻登(イナオキ)と(イナキ)おて知るべし  
○シツライ  
患臣徽三段目カホヨ御前の言葉  
へ。と横の通音ありへの本音轉してレとあり又轉して堅のヲとあをるにて疾病の字音あり其例ハ木のウへをウレと云ひ又轉して木の

ウラとあると同一万葉おとに梢(ウラ)を(ウレ)といへる証多し

○メ<sup>ン</sup>ヨ<sup>ウ</sup> ヲあるを以て轉してヨウとされるにて迷當の字音あるべし  
其例と京攝おとにて誰さん云ふへたと誰りて誰やんといふと同じ  
かるべし(お竹やんお梅やんの類の如し)

○ア<sup>ン</sup>シ<sup>ョ</sup>シ<sup>マ</sup>シ<sup>ョ</sup> 京攝間の語に多し

此の語と元と案じ能く仕まよふ(ア<sup>ン</sup>シ<sup>ョ</sup>シ<sup>マ</sup>シ<sup>ョ</sup>の語のヨウ  
のクを省死語尾のウと零し考るものよして其意ハ(能き都合に在る)或  
ハ(うま<sup>く</sup>や<sup>り</sup>ま<sup>よ</sup>ふ)の意あり

○サ<sup>カ</sup>ヒ<sup>ノ</sup> 京攝の方言

此の語と際<sup>の</sup>字に<sup>く</sup>際<sup>ハ</sup>物の境界といふ又間<sup>の</sup>意あり間<sup>の</sup>字ハカラ  
といふ(斯うするさかひ)ハ(斯うする間)の意あり東京方言の(から)に同じ  
かるへし

○ま<sup>の</sup>ん<sup>に</sup> 轉するもの

○ま<sup>ん</sup>さ<sup>ひ</sup>を 志<sup>さ</sup>とあり

○み<sup>ん</sup>さいを み<sup>あ</sup>とあり

りの<sup>い</sup>に轉するハ母韻に違れるあり

○あ<sup>ん</sup>さまを にはの<sup>ん</sup>に轉するもの

○ら<sup>ん</sup>(蘭)を ら<sup>あ</sup>とあり

○た<sup>ん</sup>を(丹波)を た<sup>あ</sup>とあり

○と<sup>う</sup>ま<sup>さ</sup>けんを と<sup>う</sup>ま<sup>さ</sup>けんとあり

○せ<sup>ん</sup>(錢)を せ<sup>あ</sup>とあり

○た<sup>ん</sup>さ<sup>く</sup>を た<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>ん</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○と<sup>ん</sup>だ<sup>こ</sup>とと と<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>う</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○と<sup>う</sup>だ<sup>だ</sup>を と<sup>あ</sup>とあり

同上の諸のうに轉せるもの

○う<sup>ひ</sup>や<sup>ら</sup>ひを う<sup>あ</sup>とあり

○と<sup>つ</sup>を<sup>く</sup>む<sup>む</sup>と と<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○よ<sup>む</sup>をよ<sup>あ</sup>とあり

○同上のうお轉せるもの  
 ○うらべた かまへあり(首)  
 ○あうべと あまへあり(神戸)  
 ○うらぐいとあまのいあり  
 以上のこのうあんのうに轉せる能狂言等の語に多し又長州の人と  
 飛びてさとうでの如くびよりんに轉し又うま轉せり  
 ○あんなあたらん(汝知らざる乎)と ああさまりあさるぬあり  
 ○あのに通しさのとお通せるのあ前例と同じくさま横お通せし  
 あり  
 ○さあんなあま さありあふり  
 ○まぬべと まりぬべあり  
 ○つんざくと つささくあり  
 ○ゆんべ(或いよんべと) ゆうべあり  
 れのんお轉せるもの

○こんちものこ これのものあり  
 此外精密おまらぶれを猶いくらもあるへし只語の上品に聞みへ下品  
 に聞ゆると此の轉訛の響の輕重およるあり  
 物理のこあり 在大坂 雲井生  
 今度極々手近き日々の出来事母就く誰も見ることと一寸理の  
 解せぬものと擇みて左に録してお目お掛けますへく萬物萬事  
 氷の冷かある火の熱き無我無中に過ぎされ何もあはれものあれ  
 ともさて一つ注意して見るとお芋かあせ煮へたのさつむり分々  
 ぬものにて此の分らぬのが無學文育馬鹿間拔と申あれと喜んで  
 も小供衆と萬物万事に注意か大切學と入らざるお世話あら筆  
 の序に  
 ○あぜ茶碗へツク々と泡のたつと茶碗の周圍へ其泡がよりまそり  
 み色の即ち物体の引力といふものにて茶碗の引力の泡を引きつける  
 あり  
 ○あせ又小さき泡の大きき泡の方へよどつさまその  
 み色の同じ物あらば大きき物の方の引力の強死もの故に小さい泡と  
 大死な泡の方へ引付けらる、あり

○泡のたちらたる釜の中へ箸をいさる。泡のあせ箸にそいつきますか  
 是も前と同様に箸の分子の引カク泡より強故箸の方へ泡かそい  
 つくあり

○池の岸の方の木の葉の集りて池の中心に之塵もあたいあせてまよ  
 う  
 是も池の岸の引カク木の葉を引きつける故池心に木の葉のあきあ  
 り

○柿うとうして地へ落つるのをすか  
 地は引カクあり

○とういふ理を私に睡りまする  
 睡りと脳と神経の休むあり

○あせ睡れる内之眼と開て居ても何も見へませんか  
 眼中の網膜の働らすして休める故あり

○あせ睡中よこ音を聞かせぬ  
 聴感のそへて休める故あり

○あせ睡中あせ味の分りません  
 味神経の働かすして休める故あり

○あせ睡中に觸る、も感ませぬ  
 神経の末端皆働らすして休める故あり

○あせ睡中に之何も思ひませぬ  
 腦中の後部の小腦の休みく働らすぬみよるあり

○あせ夢と前後をるをぬことを見ます  
 前腦の休みて働らす決定力識別力等の働ぬによるあり

○人の感愛を失ふも何故ぞか  
 亦前腦の害を受て働かぬあり

○人むとういふ譯で休へさると感します  
 是の神経の末端が皮の内面集りするものに觸き是よと腦に傳達す  
 るにてあれと感愛といふ

○人とごういふ味を知り分けます  
 舌の内味神経あてて食物の此の神経は觸る、によと其物の感觸の  
 激動の如何によりて知り分くるあり

○あせ老人む歩行ませぬ  
 筋肉の堅硬にありて撓之難死に因るあり

(以下次号)

黑板墨製法

黑板の通例横巾六尺のもの二枚と掛くとも是は却て狭に教場ふ不便  
ふるもの故横巾六尺のもの一枚と三尺のもの一枚とあて都合九尺の横巾  
あれを足りかん  
黑板の墨の舶來のもの二升五合入程にて七八圓の價あれと地方の學校  
あとの後來の利不利と儲けさ役人の其價の貴き母驚きて無駄あるものと  
それとも到底此の舶來のものを用ゐるに保ち方よく大益あれとも田  
舎あとの教師と斯かるものあるやもあらされとも亦行それ難に説ふり  
さきととて漆を塗りたるの板面光澤ありと光の反射強く左側或は右側よ  
りと文字の見へす且生徒の目の爲めによろしからず又遊墨と塗りたるを  
剥けて手に黒きものつれて夏あとの甚不快を覺ふるの事あるす一年に  
四五度も塗り替へされと用をあさる因り我輩が數度經驗したる製法を  
詳記し以て教師に贈らむとを此の法を遊墨より其價貴とけれとも舶來  
のものよりと廉あり且又保ち方も大によし

製法

セルラック 樹脂質のものあて水或は熱湯あて溶解せず  
アルコホル 三十五度より四十度のもの

松烟 あしきもこれにてよし  
右のセルラックとセルラックハ藥種屋にあと一斤二三十錢あらと買ひ得  
へし細かお砕死廣口の罎の内母のきみききにアルコホルを滴下し罎口を堅  
く封し置き時々振り動かし廿四時間程を経るときセルラックと皆溶解  
すべし  
此の溶解するものに又アルコホルを注入し稀薄液とあし白き板に塗り  
て稍黄色を呈するまでとせ  
又別に松烟にアルコホルヲ注ぎ能く攪和し(搗盆にく磨すべし)粒を死を見  
これをも亦稀薄液とあす  
此の二液を適宜に混合しあるき稀薄液とあし板に塗り試み日光の或は  
火にて乾かし指にく厚するも墨の指につるを見るに貯へ口を密閉  
え置くべし  
若又指につくときセルラックの濃液を別に貯へ置死之を注入し絶へそ  
攪和し能く攪和せしむべし  
右の墨を塗るに極めて瞬速に取扱ふべし然らされとアルコホルを速に  
揮發して大に其量と減すべし  
右と塗るふ一ヶ所のみ濃く塗る可らと稀薄あるものと薄く二三度も塗る

をよりとす  
久しく貯へざる墨を自然濃厚あるもの故にも濃死と死をアハコホル

と適宜母注入すべし  
黑板と塗り終る後二三時間と過れ用ひ得べしと雖ともあるへくの一週

程風の通のよき所あて乾らしく後用ひると死に猶佳なり  
右の墨あても松杉などの板目の陳ある木に塗ると死に木理の上の所より

剥脱するものあり故に黑板と柏類の木理の緻密あるものを選びべし  
に尤適するもの桐の木あれとも價貴くして尋常の小學あとも用ひ可らず

右の墨を製せざるも塗るも少しく手加減あるものあれとも之を製し之を  
塗るに先少しつゝ試むべしむやみにせると誤ることあり誤り終るまで

記者に罪と歸するふと勿れ製作物ことんを物めても熟練といふふとあて  
能く慎みみく此の法と試みたまへ合計の價を黑板一枚に付十五錢より二

十錢得とも掛るへし  
○堺縣の試験訓導として試験のみを試験しくあるく訓導さん有て大抵

雑報

一大區つゝ受持のよしふれとて小學の教師さんつるること出来ま  
しと申事

○播磨の國の或る學校之餘程盛ある故此の學校へ任し教師を價段の上  
るとて皆此の學校へ任しての直に轉校せざる教師の登龍門ともいふべし

然し腰掛や或は位取の爲めにあられてつづまらぬと何れの投書  
○何処たか小學の教師の給料滞るを以て渡さぬ故此の教師さんさちる

申合せてとうせ渡さぬなら獻金と云ふと相談のきまを獻金し何処か皆  
賞杯を賜りたると何の事々々つとを分らぬ

○堺縣にたまの中學をあてよし  
○或る官立の師範學校を卒業し学訓導さんと試験まゝ何処か甲乙立派に答

か出来たが乙と不出来ありと一つ畑に出来た茄子でもこんあ母違ふとと  
其のくせ肥も同じやうなみにふきから新田の西瓜のりが甘ひといふ譯

にもいかにと何たり八百屋か植物學者と見やふを投書のありまゝ何  
処の事か

○當英語學校にて再びペンヨーさんをお雇ひせよと  
○今度御巡幸送迎母小學生徒は何処も質素めてお祭を然るることありと

是か本統あるべし  
○お祭の咄について申上る次第と神様を敬ふと敬ふと敬ふと敬ふと

とさのお祭の跡から旗を押立てお供とするのナト神官と學校と混合ま



た譯だと小言を言ふ教師かありませぬ。が記者と見た事とあいかそんな地  
方も有りませぬ。のちらん  
○米國紐約府の「セッコンド、アヘコユー」流車會社にてこ過般流車の機關を  
改良し更に換ふるに一種新工夫れ、機關を以て、器中に空氣と壓搾しく以  
て車を驅逐せしむるものと試験せしめて其結果さる頗る實際に適合す  
るの望みあるにより該社にてハ數十輛の車を新造せる積りのよ、抑該器  
の構造たる極めて簡便よし、且其形狀甚小なり而して流車の機關の如く  
人として蒸氣の熱と惡臭に苦しませむるの患なく、又該器れ便利之器械及  
ひ罐の馬力蒸氣機關と同一の者と雖も其重量廻に蒸氣機關より輕しと  
ぬふ右インシニエリソク新聞抄譯と工業新報母あせました  
○君も今日劇場百覽會を見よ行ふ僕と未だ行ぬと十四五の女の子の  
咄して通つたの僕と女性の代名詞のと記者にお尋問ふともやつたり僕  
と知らぬと答へて置きませした  
○動物の血液を皆其熱度の同じからさるものにて左の如く其種類により  
て違ふもの故記してお子供衆におめに掛けませす。

燕

熱度(華氏寒暖計)  
一一、二五、

鶏及ヒ鴨  
鷄  
鷓鴣類  
鳩  
鸚鵡  
蝙蝠  
栗鼠  
牛  
猿  
犬  
猫  
象  
馬  
人  
みれによりて見ると人の温度より一番低くき故他の獸を抱て眠ると死の暖  
かあり故に能く猫を抱くといへるふとか諸新聞に見ゆるか是ハ寒を恐る  
る人のするとさからんと語りませる人あり、實にさもありあんと笑ひつ

- 一〇六より一一一まで
- 一〇二より一〇九まで
- 一〇四より一〇七まで
- 一〇六より一〇九まで
- 一〇〇
- 一〇六
- 一〇五
- 一〇四
- 一〇三
- 一〇一
- 九八より一〇三まで
- 九九
- 九八、二四、
- 九八

つ或人の物語られし記記者も甚かありしを  
 ○當地の知新館の演説も阿彌陀池の本堂に移さるる故廣くて聴衆も餘  
 程盛んふと又神戸の相生學校の演説も追々盛んあり  
 ○當府の師範學校教師の平津貞造、石井鈞三郎の兩先生之中の嶋の中學校  
 の教師と兼勤の命ありしよし追々中學が盛んありと教師の不足の故あり  
 ん結構のことにある  
 ○當地にも商船學校を取設よあるより實に當地之船舶輻湊の地にて既  
 下通の小氣船の數も五十餘艘ある位故商船學校之何より必用と思われま  
 す之の一世の教育者の希望する工業學校之未嘗時機の來らぬや何処に  
 立ちしといふふとも聞かざるか何時出来ることか早く立てとい、と大工  
 や鍛冶屋か待て居るといふ政府にも定めて御如才とあるま一案しること  
 とあり  
 ○昔一七日本と武の國と稱し武威の盛ある國ありしと大學ありて射御  
 を教へ下りて武家よありて毛弓馬槍劍より以て文學に至るまでを教育法  
 た故斯く武も輝きわけたか今の教育法より文弱に流る、弊もあるゆゑ中  
 學及び師範學校等にいせめと劍術をけり設けたいと或る老人のたまひき  
 りき

# 稟告

讀岐中條澄清譯述

## 代數學教授書卷之一

八月一日ヨリ發賣

此ノ卷ハ代數學ノ旨意諸命名各種記  
 号ノ用法代數式記法正負ノ性質公理  
 等ヲ詳説ス

## 代數學教授書卷之二

近刻

此ノ卷ハ加減乗除及ヒ乗算ノ公積除  
 算ノ公理負指數零累乗等ヲ詳説シ就  
 中加減乗除正負ノ變化ハ最モ深切ニ  
 解セリ

神戸相生橋東詰 鳩居堂

大坂心齋橋通 松村九兵衛

東京大傳馬町 東生龜次郎

西京寺町四條 田中治兵衛

但シ卷ノ一六月中發兌ト本紙ヲ以  
 テ廣告致候得共彫刻遲引ニ付廣告  
 期限ニ後レ不都合不少謹テ五待兼  
 ノ諸君ニ謝ス尙卷ノ二ハ現今校合  
 中ナレハ精々至急ニ發兌可仕候間  
 偏ニ御愛顧是祈ル

花紋 學校用墨汁 各種  
 賞牌 上製墨汁

右ハ岡本則録天野岐ノ兩君大坂官立  
 師範學校在勤中墨ヲ磨ルノ迂遠ニ  
 シテ冗贅ナル時ヲ費シ且ツ教場ノ休  
 裁ノ整頓セサルヲ患ヘ多年ノ工夫ヲ  
 以テ新製セラレタル墨汁ニシテ其色  
 澤ハ些モ在來ノ墨ニ異ナラフ其學校

用ハ甚廉ヨシテ且生徒磨墨ノ勞ナク  
 上製ハ其色温然トシテ却テ唐墨ニ勝  
 ル風致アリ文人墨客ノ多數ノ墨ヲ要  
 スルモノニハ甚便ニシテ且廉ナリ右  
 何レモ無味無毒ニシテ決シテ惡臭ナ  
 シ右ハ大坂西京博覽會ヘモ差出シ置  
 候臣御實檢可被下候  
 右ハ一昨年來開店致居稍ク世人ノ實  
 檢ヲ經實益判然致シ從テ賣捌所等澤  
 山取設置候新規賣捌御望ノ方ハ製造  
 本局ヘ御申越被下候ハ、賣捌規則差  
 上可申候

明治十一年三月

大坂府下網島町二番地  
 墨汁製造所本局

藤精九郎

社告

東京京橋新町五番地教育社

内外教育新報

一周二号 火曜日發兌  
 金曜日發兌

一部金四錢〇十部前金三十六錢〇三  
 十部全金一圓〇白部前金三圓二十錢  
 右弊社ニ於テ賣捌仕候

教育新聞

改正定價〇一部二錢五厘五部  
 十四錢十部廿五錢〇府外定價郵稅共ニテ  
 一部四錢五厘五部十九錢十部三十五錢  
 〇發兌日毎月一ノ日ニ付一ヶ月三回

大坂網島町二番地

假本局

大坂心齊橋筋二丁目四番地  
 教育新聞社  
 賣捌事務取扱所 進取社活版局

編輯兼印刷

天野・皎

終